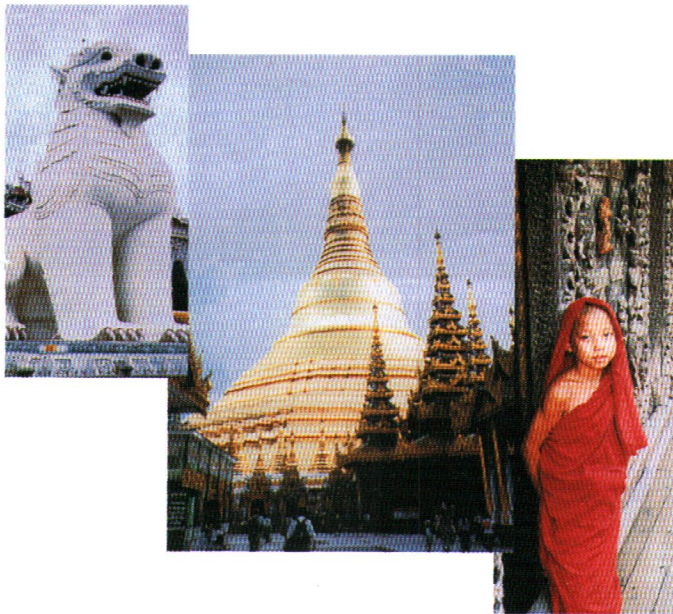




NPO法人 日本・ミャンマー医療人育成支援協会

岡山県認証番号 第306号

ご案内 Information



ごあいさつ



理事長
岡田 茂

地球環境はグローバル化しています。鳥インフルエンザのような感染症であっても、これはもはや局地的な疾患ではありません。日本の将来的な健康政策も周辺諸国との連携を保ちながら進めなければなりません、これには同一の医学基盤に立つ医療人の信頼関係が何より大切です。しかし、日本周辺の東南アジア地域では近代医学に立脚した医療人の育成は滞っており、グローバル化対応の医療環境構築は困難な課題となっています。

その一方で「衛生面における安全」は東南アジアに住む人たちの最も切実な望みですが、この面でも、近代医学の移入は遅れています。私たちは人材育成、医療に関心を持つ専門家として、ミャンマー（旧ビルマ）との医療協力で長年携わってきました。ミャンマーでは近代医療に通じた人材が少ないため、財政的な援助だけでは医療の近代的な発展は望めない状況です。その経験から、日本・ミャンマー間の医療協力と人材育成のためのNPOを設立し、ミャンマーの将来の医療リーダーを育成し、この人たちに東南アジアの医療近代化の一端を担ってもらおうと2006年3月に設立しました。皆様のご支援をお願いします。

設立趣意

ミャンマーの歴史的な背景と日本との関わり。
さらに、私たちの医療協力の必要性についてご紹介します。

1. ミャンマーは親日国

ミャンマーは親日国です。英国の植民地だった第二次大戦中の1942年（昭和17年）、日本はビルマ独立軍の組織化を行い、共に英国軍を駆逐しました。翌43年にはビルマは独立を果たしました。しかし、実際は日本軍による軍政が日本敗戦直前まで続いています。この間約30万人の将兵が日本から送られ、19万人が戦病死しています。

英国は統治中、ビルマの多民族を分離・統治し、民族間の憎悪を育て、ビルマ人から将校、技術者、政治家になる途を奪いました。戦後の復興を支えたのは戦時中、日本によって教育を受けた技術者、将校であり、日本の経済支援でした。



(ミャンマー伝統工芸)

2. ミャンマーは世界の最貧国

戦後の経済政策の失敗により、世界の最貧国のひとつとなっています。民族間の憎悪から発展した内戦はいぜん尾を引いています。現在の軍政はその名残ともいえます。

3. ミャンマーは教育熱心

小学校、寺院を中心とする初等教育はいきわたっており、英語教育も盛んです。医学教育をはじめとする高等教育は英語で行われており、医師達は意欲もあり、有能です。

4. 感染症の猛威

感染症が依然として猛威を振るっています。下痢症、蚊などの媒介する疾患（マラリア、フィラリア症、日本脳炎、デング出血熱など）、寄生虫病、結核、エイズ、ハンセン病、ウイルス性肝炎などが多いのです。また、熱帯地方特有の遺伝性血液疾患もあります。国民医療は伝統医療が中心であり、現代医学に対する知識、欲望はあるが普及していません。



(2002年献血車の寄贈時のテレビ局のインタビュー)

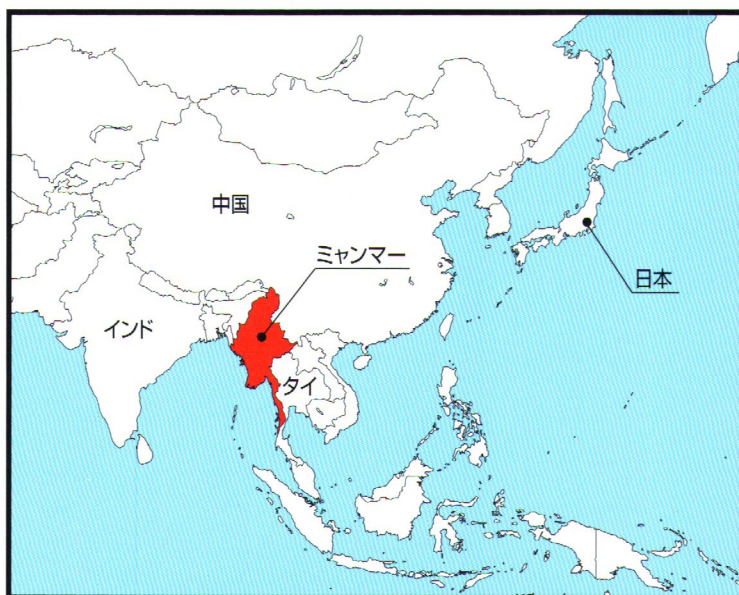
5. 疾病のグローバル化への対応

疾病のグローバル化への対応した感染症対策、遺伝子解析など行い知識を蓄える必要がありますが、ほとんど手をつけられていません。ミャンマーでは現代の分子生物学に精通する科学者が少ないのが現実です。



(毎年4月には水まつり)

6.医療人育成の必要性



現在の軍政下では、日本からの医療援助を含めた大規模な対外援助は望めず、相互の繋がりが非常に細くなってきており、特に信頼関係による人脈を通じた交流はほとんど不可能となっています。これは日本にとっても損失は最も大きいのです。

地球環境のグローバル化に伴い、感染症を中心とする疾病を局地的な枠組みで理解することは意味がなくなってきました。日本の将来的な健康政策も、グローバルな観点に立って築かなければなりません。

NPO立ち上げに至るまで

1996年(平成8年)より岡山大学医学部病理学第一講座教授の岡田茂を中心に、ミャンマーとの医療協力を開始し、遺伝性貧血症の遺伝子解析と保因患者のホルモン解析、ミャンマーにおけるC型肝炎の知識普及事業、ミャンマーのB型・C型ウイルス肝炎の遺伝子解析と慢性肝炎患者の瀉血療法の開始、輸血用血液のC型肝炎ウイルスのスクリーニング開始と輸血事業の改善、ピロリ菌の遺伝子解析、甲状腺疾患の病理組織解析などを進めました。同時に、これらの事業に関わる医師の育成もしてきました。この活動は文部科学省(当初は文部省)、JICA、外務省「草の根無償援助」資金、岡山大学COE資金によって行われました。

この間、2002年12月には岡山大学とミャンマー保健省医学研究局(Department of Medical Research)・医科学局(Department of Medical Sciences)の間で大学間協定が結ばれました。医科学研究局の下に各医科大学(ヤンゴン2校、マンダレー、マグエ)、歯科大学(ヤンゴン、マンダレー)、薬科大学、看護学校、コメ

ディカル養成施設があり、現在、これらの大学や施設から毎年岡山大学に研修生が派遣されています。

2005年(平成17年)に岡田茂が定年退職し、岡山大学名誉教授となり、学校法人加計学園理事、玉野総合医療専門学校長、岡山大学客員教授に就任しました。これを機に、上記のミャンマーにおける活動内容を基盤として、医療協力、専門家の育成などを一層推進するため、NPOを立ち上げました。



(2000年8月“C型肝炎対策”の第一回シンポジウム)

これからの主な活動

特定非営利活動法人日本・ミャンマー医療人育成支援協会

事業実施の方針

ミャンマーにおける医療人(医師・歯科医師・薬剤師・看護師・コメディカル)および医療協力者の育成を支援するための事業です。政府機関、民間の援助団体、個人の支援者と協力し、人材交流、研究交流を促進します。岡山大学とミャンマー保健省医科学局・医学研究局との大学間協定に基づく医学研究者の交流を支援します。岡山を中心とする国内医療機関、教育機関における医療人および医療協力者の研修・研究を促進します。また、ミャンマーにおける医療実践を支援します。

この方針に基づく組織の活動をホームページなどにより広くアピールし、会員、賛助会員を幅広く募集し、交流を促進するための基金の拡充を図ります。

NPO法人日本・ミャンマー医療人育成支援協会役員

顧問	加計 孝太郎(学校法人加計学園理事長)
理事長	岡田 茂(岡山大学名誉教授,元医学部長,加計学園理事)
副理事長	小出 典男(岡山大学医学部教授・大学院医歯薬学総合研究科生体情報医学)
理事	石川 隆俊(東京大学名誉教授,元医学部長)
	岡本 敬の介(岡山大学薬学部教授・大学院医歯薬学総合研究科遺伝子機能科学)
	小熊 恵二(岡山大学医学部長・大学院医歯薬学総合研究科病原細菌学)
	小路 武彦(長崎大学医学部教授・大学院医歯薬学総合研究科発生機能分化再建学)
	坂本 秀樹(三菱ヤトロン株式会社中日本ブロック長)
	下野 國夫(医療法人関谷会理事長)
	眞治 紀之(岡山大学医学部講師・附属病院中央検査部)
	武田 和久(岡山大学名誉教授,脳神経センター大田記念病院治験センター長)
	田中 茂人(田中医院院長,元岡山市医師会長)
	中山 睿一(岡山大学医学部教授・大学院医歯薬学総合研究科免疫学)
	西崎 建策(日本高校野球連盟理事,元大阪市教育委員長)
	西山 照子(有限会社茜代表取締役社長)
	前坂 匡紀(岡山商工会議所副会頭,岡山毎日広告社会長)
	三橋 正和(林原生物科学研究所常務取締役)
	三村 公人(岡山放送報道局次長)
	皆木 省吾(岡山大学歯学部教授・大学院医歯薬学総合研究科咬合・口腔機能再建学)
監事	森 昭胤(岡山大学名誉教授,同客員教授,大学院医歯薬学総合研究科アンチエイジング食品科学)
事務局長	佐藤 春雄(元岡山市立旭公民館館長)

入会方法

正会員 入会金 3,000円 年会費 6,000円
賛助会員 入会金 10,000円 年会費 50,000円 ※郵便振替にてお振り込みください。
会員になられた方には、会員証を発行させていただきます。
また、会報誌の発行、総会、健康相談会を開催する予定です。

お問い合わせ



NPO法人
日本・ミャンマー医療人育成支援協会
ホームページ <http://www.mjcp.or.jp>

岡山県岡山市番町二丁目6番7号
tel. 086-224-0102

ひと
や渡航費を援助している。
南方戦線に出征していた

「目前にある命を救うのが医師の使命。国の体制の違いは問題ではない」。軍事政権下にあるミャンマーの医療水準を引き上げるため、岡山大退官後の06年、岡山県内の医師らと非営利組織(NPO)を設立した。これまでに研修生12人の日

ミャンマーの医療研修生を支援する

おか だ しげる
岡田 茂さん(68)



父から、ミャンマーの話をよく聞かされた。96年、赤道周辺地帯で頻発する遺伝性貧血に取り組み始めた。研究が不十分だった同国では、治療で輸血を受けた患者

者の約9割が、C型肝炎ウイルスに感染していた。「医師として放っておけない」。横行する売血が背景にあり、検査体制整備や献血制度の充実をミャンマー人医師らとメディアを通じて訴えた。結果、売血は禁止され、献血が輸血の柱になった。同時に「近代医療を担い普及する人材育成が必要」と痛感。研修生への援助につながった。研修生たちは帰国後、保健当局や総合病院の要職に就き、今年5月のサイクロン禍では、休日返上で医療活動に携わった。メール交換するうち、「居ても立ってもいられなくなった」。仲間らと7月に現地入りし、救助物資や肝炎の検査器具などを手渡した。21日、再びミャンマーに赴く。「一過性の支援では意味がないことを私たちは知っている。決して見捨てない」

文と写真・石戸諭

岡山市出身。岡山大名誉教授で、日本・ミャンマー医療人育成支援協会理事長。趣味はゴルフ。